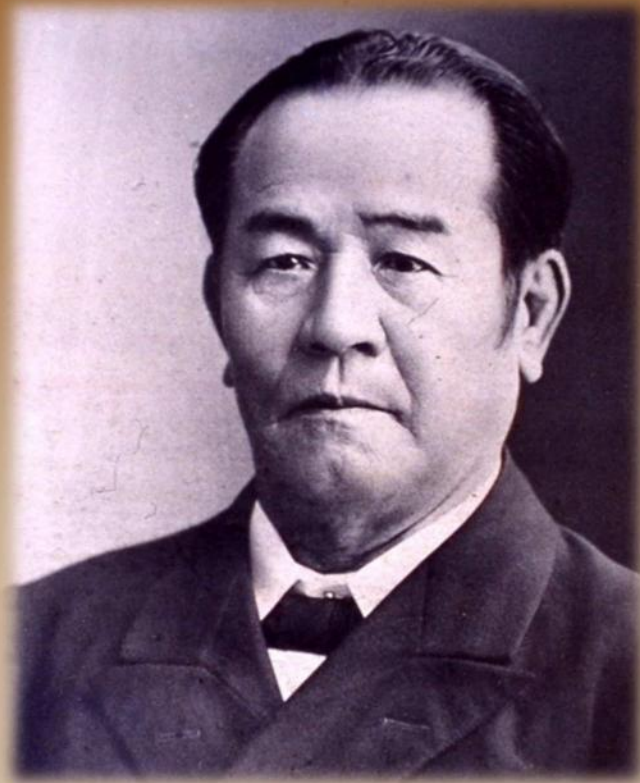


令和3年大河ドラマ「青天を衝^つけ」放映決定！

日本資本主義の父

渋沢栄一と井原



渋沢栄一は、一橋家の家臣となり、

農兵を集めるため領地であった備中国西江原村（現岡山県井原市）を訪れました。

興讓館の館長阪谷朗廬と語り合い、親交を深め、

農兵募集は大成功をおさめ、慶喜に認められます。

井原は栄一にとって世に出るきっかけの地でした。

・ 渋沢栄一（1840－1931）について

明治・大正期の実業家。武蔵国血洗島（ちあらいじま）村（現埼玉県深谷市）の豪農の長男として生まれました。元治元年（1864）一橋家に仕え、一橋家の家政の改善などに実力を発揮し、次第に認められていきます。栄一は27歳の時、15代将軍となった徳川慶喜（よしのぶ）の弟・後の水戸藩主、徳川昭武（あきたけ）に随行しパリの万国博覧会を見学するほか欧州諸国の実情を見聞し、先進諸国の社会の内情に広く通ずることができました。

明治維新となり、欧州から帰国した栄一は、「商法会所」という会社を静岡に設立、その後、明治政府に招かれ大蔵省の一員として新しい国づくりに深く関わります。

明治6年（1873）に大蔵省を辞めた後、栄一は一民間経済人として活動しました。そのスタートは「第一国立銀行」の総監役（後に頭取）でした。

栄一は、第一国立銀行を拠点に、株式会社組織による企業の創設・育成に力を入れ、生涯に約500もの企業に関わったといわれています。また、約600の教育機関・社会公共事業の支援並びに民間外交に尽し、多くの人々に惜しまれながら昭和6年（1931）11月11日、91歳の生涯を閉じました。

渋沢栄一、慶応元年（1865）春、備中へ来る（井原滞在時のエピソード）

① 剣術の先生をいともたやすく負かす

栄一が、当初農兵募集がうまくいかなかったため、庄屋に剣術家と学者の紹介をしてもらった。朗廬と語り合った後、領内の剣術の先生と手合をしてやすやすと打ち負かした。この評判が領内に瞬く間に広まり、栄一のもとにたくさんの方が押しかけたという。

② 栄一が鯛網観光

栄一が、この辺りで何か面白いことはないかと聞くと、毎春、笠岡で鯛網があるということで、朗廬は栄一を招いて、興讓館の書生を連れて笠岡へ鯛網観光に出かけた。鯛網は大漁で、捕れた鯛の料理を肴に栄一は、酒を酌み交わし、すこぶる上機嫌となった。



渋沢栄一(号は青淵)の書（興讓館所蔵）

「爾(なんじ)の為に居諸(ぎょじょ)を惜(お)しめ」(自分のために時間を惜しんで使いなさい)



朗廬が慶喜より拝領した大刀（興讓館所蔵）

渋沢栄一から興讓館へ寄贈があった慶喜の書（興讓館所蔵）

博(ひろ)く民に施(ほ)して能(よ)く衆を濟(す)く「
民衆に施(ほ)して國を治めなさい」という領主の心得



・ 渋沢栄一と井原のかかわり

(1) 渋沢栄一と農兵募集

渋沢栄一が仕えた一橋家は、兵備がほとんどなく、領主一橋慶喜(後の徳川慶喜)が京都守衛総督となったため急遽兵備を拡充する必要に迫られました。栄一の建議により、領内で農兵を募集することとなり、西日本で最大の領地であった備中国へも、慶応元年(1865)、栄一自ら赴いて、農兵の募集にあたりました。募集当初は、難渋していましたが、阪谷朗廬と面会した後、栄一への信頼感、親近感が急速に増し、領内より200人余りの農兵志願者があり、近畿の領内の志願者と合わせると450人を超え、大成功を収めました。栄一は、農兵募集のため備中国へ赴いた際、領内の産物調査、善行者の褒章を実施し、阪谷朗廬も一橋慶喜に京都へ招かれ、慶喜より直接、褒賞されました。栄一はこの成功を機に慶喜に認められ、藩の施策に関わるようになり、栄一にとって大きな転機となりました。



阪谷 朗廬

(2) 渋沢栄一と阪谷家

阪谷家は、朗廬が興譲館の館長を辞め、広島藩に仕えた後、東京へ出て政府の役人となったため一家をあげて上京します。朗廬は、60歳で亡くなりますが、一家はそのまま東京にとどまります。その後、四男の芳郎は、東京大学を首席で卒業、大蔵官僚となり、大蔵官僚若手のホープとして活躍します。さらに栄一の二女琴子が朗廬の四男芳郎のもとに嫁ぎ、阪谷家と渋沢家は縁戚関係になりました。芳郎は、国家予算の編成を行うなど実績を積み、大蔵次官、大蔵大臣を歴任します。大蔵大臣を辞めた後、東京市長(現在の東京都知事)に就任し、東京市の市政のかじ取り役として、明治神宮の建立などに尽力します。



晩年の阪谷芳郎と琴子

(3) 渋沢栄一と馬越恭平

木之子村出身の馬越恭平は、阪谷朗廬が開いた桜溪塾で勉学に励んだのち、丁稚奉公するため大坂へ出ます。その後、三井物産に入り、商才を発揮し、三井財閥発展に貢献します。恭平は、経営不振の日本麦酒再建を引き受け、日本麦酒を、ビール業界トップの会社として成長させます。さらに、ビール業界再編に携わり、渋沢栄一の協力のもと日本麦酒、札幌麦酒、大坂麦酒を合併した大日本麦酒を設立し、栄一の強い要望で初代社長に就任しました。恭平はビール業界へ多大な貢献をし、「東洋のビール王」と呼ばれました。



馬越 恭平

・ 渋沢栄一ゆかりの地

○興讓館校門（西江原町）

安政4年（1857）に建てられた校門。門に掲げられた「興讓館」の扁額は、朗廬と親交あった渋沢栄一が明治45年（1912）に揮毫（きごう）したもの。

また、栄一が当地を訪れ、朗廬と面会したと考えられる講堂が当時のまま残る。



興讓館校門
（中央に掲げられた扁額が渋沢栄一揮毫のもの）

興讓館講堂

（開校当時のものが今も残る）



○一橋陣屋跡（西江原町）

文政11年（1828）、現在の井原市を中心に3万5千石余りが一橋領となります。一橋領の陣屋は、現在の西江原町に建てられ、代官が赴任し、治めていました。

慶応元年（1865）、一橋家の家臣であった渋沢栄一もこの陣屋を訪れ、農兵を集めるため、代官と協議したことが考えられます。



絵図に描かれた一橋陣屋と興讓館



現在も一橋陣屋跡には一橋家家紋（三つ葉葵）の瓦が残る

○大山石次郎農兵記念碑（笠岡市走出）

この碑文は、走出村の大山石次郎という農民が農兵に応募し、活躍したことを、80歳になったときに記念とすべく、当時興讓館の館長であった山下秋堂に撰文してもらい石碑としたものである。

碑文によると、農兵となった石次郎は苗字帯刀（たいとう）を許され、名前も有岡菅之丞と変え、3年間にわたって戊辰（ぼしん）戦争で関東、東北地方を転戦したとある。



持宝院（笠岡市走出）の境内に残る農兵記念碑